

第17歌 テレマコス、帰館

[テレマコス](#)は屋敷に帰館し、母に会った。[オデュッセウス](#)と豚飼は後から屋敷へ向かった。[オデュッセウス](#)は屋敷の入り口で愛犬と再会した。[オデュッセウス](#)は広間で食物を乞うて求婚者の間を回ったが、[アンティノオス](#)に足台を投げつけられた。[ペネロペ](#)は夫の消息を知るために、乞食姿の[オデュッセウス](#)と会う約束をした。

内容

テレマコス屋敷に帰館する 翌朝、[テレマコス](#)は豚飼に「わたしはこれから町へ行き母に顔を見せてくる。そなたはこの気の毒な客人を町へ連れて行き、食物を物乞いできるようにしてあげてほしい」と言って、町へ出かけていき、屋敷に着いた。乳母の[エウリュクレイア](#)が彼に気付き、嬉しさに泣きながら出迎えた。[ペネロペ](#)は部屋を出て、我が子を抱きしめ、泣きながら旅先のことを訊いた。テレマコスは「さあ、あまり泣かないで下さい。わたしはこれから帰国の旅に同行し[ペイライオス](#)に預けておいた客人を迎えに集会場へ行ってきました」と言った。

テレマコス客人を迎えに行く [テレマコス](#)は集会所へ行き、[メントル](#)、[アンティポス](#)、[ハリテルセス](#)ら親しい友人たちに会い、[ペイライオス](#)の連れてきた客人[テオクリュメノス](#)を迎えた。ペイライオスは「テレマコスよ、[メネラオス](#)からの贈物をそなたの屋敷に運びたいのだが」と言った。テレマコスは「屋敷の状況がどうなるか分からない。もし求婚者がわたしを殺害したら、これらの財宝が彼らの手に渡るよりは、ここにおいでの方々の持ち物となる方がよい。しかし、わたしが彼らに天誅を加えて討つことができたなら、その時こそわたしの屋敷へ運んでくれ」と言った。

テレマコス母に旅の話をする [テレマコス](#)は客人を連れ屋敷へ戻った。二人は湯浴みして、食事をとった。母[ペネロペ](#)が来て二人に相對した。食事がすむとペネロペは旅先での話をせがんだ。テレマコスは[ネストル](#)と[メネラオス](#)を訪ねたことを話し、[オデュッセウス](#)は仙女[カリュプソ](#)の島に留められ、船もないので故国へ帰れないでいるらしいことを話した。[テオクリュメノス](#)は「奥方よ、確かな予言をします。オデュッセウス王はすでに故国に帰っておられます。どこにおいでか分からぬが、わたしは船上で予兆を見たのです」と言った。ペネロペは「その通りになって欲しいもの」と答えた。求婚者たちは屋敷の前で円盤や槍を投げて遊んでいたが、夕食の時間になり、牧人たちが羊を連れてくると、屋敷に入って夕食の用意をした。

オデュッセウス屋敷へ向かう [オデュッセウス](#)と豚飼は町へ向かっていた。豚飼は「主人に言いつけられたので、おぬしを屋敷に送っているが、正直いうと、わしはおぬしに農園に残ってもらった方が嬉しいのだ」と言った。二人が町の近くの清らかな泉に着いた時、山羊飼の[メランテウス](#)に出会った。彼は二人を「豚飼よ、汚らしい乞食をどこへ連れていく。この男がオデュッセウス王の屋敷へ行ったら、殿方から足台を投げつけられるだろうよ」と口汚く罵り、オデュッセウスの腰を蹴った。豚飼は「ニンフ方よ、オデュッセウス王がお帰りになりますように。そうすれば、こいつの高慢な鼻をへし折ってくださるうに」と祈った。メランティオスは「なんたることを抜かすか。この男はいつか遠くの地で叩き売ってやる。テレマコスは今日にでも屋敷で殺されてしまえばよい」と言った。

オデュッセウス愛犬に再会する [オデュッセウス](#)と豚飼は屋敷に着いた。中から[ペミオス](#)が弾く豎琴の前弾きが聴こえてきた。その時、牛の糞の山に埋もれて横になっていた、かつてのオデュッセウスの愛犬[アルゴス](#)が主人に気づいて尻尾を振った。主人に近づいていく力はもうなかった。オデュッセウスが不在の間、召使はその犬の世話をしようとしなかったのである。オデュッセウスは気づかれぬよう、そっと泣した。犬のアルゴスは主人と二十年ぶりに再会するとすぐに死んでしまった。

オデュッセウス求婚者の間を回る まず豚飼が屋敷に入り、後から**オデュッセウス**が入った。**テレマコス**は豚飼に言いつけてオデュッセウスに食物を与えたが、それを食べ終わるとオデュッセウスは求婚者たちの間をパンを乞うて回った。一同は食物を彼に施しつつ、彼は何者かと訪ねあっていた。**メラントイオス**が「妃に求婚なさる方々よ、この男は豚飼めが案内してきました」と言うと、**アンティノオス**は「豚飼よ、なぜこんな汚い乞食など連れてきたのだ」と罵った。豚飼は「わしは乞食など招いたりはいたしませぬ」と答えた。

オデュッセウスがアンティノオスに打たれる **オデュッセウス**は袋をパンと肉で一杯にした。彼は**アンティノオス**の前に行き「あなたも何か恵んでください。わしは昔は裕福でしたが、**アイギュプトス**人に捕らえられ、**キュプロス**島の王**ドメトル**に渡され、そこからさんざん苦勞を重ねてこの地へやってきたのです」と言った。アンティノオスは「厚かましい恥知らずな男だ。あちらへ行って立っておれ」と言った。オデュッセウスは「あなたは立派な風貌にふさわしい心を持っておらんようだ」と言った。アンティノオスは足台を取ってオデュッセウスに投げつけた。

ペネロペと乞食（オデュッセウス）は会う約束をする その様子は**ペネロペ**に伝えられたが、彼女はそれを聞くと気の毒な他国の乞食を憐れみ、話しを聞きたいと言って、豚飼にその乞食を連れてくるよう頼んだ。豚飼は**オデュッセウス**の所に行き、ペネロペが会いたがっていることを伝えた。オデュッセウスは「わしも一部始終をお話したいが、求婚者たちは恐ろしい。今わしは何も悪いことをしないのにあの男に物を投げつけられた。されば、日が暮れるまでお待ちくださるよう奥方に伝えてほしい」豚飼がそれをペネロペに伝えると、彼女は納得した。豚飼は**テレマコス**に身の安全に気をつけるようにと告げ、夕食をとって、農場へ帰っていった。それからも求婚者たちの宴は続き、時刻は夕方となった。

関連

人名

（作成中）

地名

（作成中）

[前へ](#) ... [オデュッセイア](#) ... [次へ](#)